



日常生活の指導

1 「日常生活の指導」とは

知的障害のある児童生徒に対しては、その学習上の特性から、実態に合わせた指導として「各教科、道徳、特別活動及び自立活動（以下「各教科等」という）を合わせた指導」を行うことができます。日常生活の指導は「各教科等を合わせた指導」の一つで、児童生徒の日常生活が充実し、高まるように日常生活の諸活動を適切に指導するものです。

指導内容は、生活科の内容だけでなく道徳や特別活動を始め、各教科等に関わる広範囲の内容が扱われます。例えば、衣服の着脱、食事、排泄、身の回りの整理などの基本的な生活習慣の内容、健康管理、危険防止などの健康・安全の内容、挨拶、言葉遣い、礼儀作法、時間を守るなど日常生活や社会生活において必要で基本的な内容などが挙げられます。

指導は、登校から下校まで日常生活全般で取り組まれています。週時程表には帯状に「登校」、「着替え」、「朝の会」、「係の仕事」、「給食」、「清掃」等で表示されることが一般的です。高等部では、「朝の会」を「SHR」として特別活動に位置付けている学校もあります。

指導で大切なことは、単なる基本的な身辺処理能力や日常生活動作の習得にとどまらず、生活の見通しを持って、その時々での生活の諸活動を自力で処理できるように、生活意欲や態度を育てることです。

日常生活の諸活動は、スムーズに取り組めれば自然に流れますが、つまずいてしまうと一日の生活のリズムが崩れることもあります。日常生活の指導では、生活の自然な流れを損なわないさりげなさが大切です。

2 望ましい「日常生活の指導」の条件

○日常生活の自然な流れに沿い、その活動を実際的で必然性のある状況下で行なうものであること

- ・ 日常生活場面では、トイレの後、給食の前、戸外から戻った時などに「手を洗う」行動をします。指導の時間を特設して、「手を洗う」という技能だけを指導するのではなく、日常生活の場面で「手を洗う」行動を積み重ね、生活習慣としての「手を洗う」技能や態度を育てることが重要です。
- ・ 「手を洗う」行動は、衛生面での手洗い、汚れを落とす手洗い、作業学習や産業現場等での実習先での手洗いなど、場面により意味や目的、方法も変わります。必然性のある状況下で行うことにより、質の高まりも図れます。

○毎日反復して行い、望ましい生活習慣の形成を図るものであり、繰り返しながら、発展的に取り扱うようにすること

- ・ 日常の諸活動は、毎日一定の時間に繰り返し取り組まれます。この繰り返される

ことが生活への見通しとなり、意欲や望ましい生活習慣の育成につながります。昨日は指導したが、今日は指導しないということのないようにします。

- ・ 「継続は力なり」といわれますが、真の力にするためには、その時々の評価を忘れず、年間の計画を立て指導の見直しを行っていくことが大切です。

○できつつあることや意欲的な面を考慮し、適切な援助を行うとともに、目標を達成していくために、段階的な指導ができるものであること

- ・ 学校独自のチェックリストや指導の手順表、あるいは先進校のチェックリストや手順表を有効に活用しましょう。指導の系統性が明確になり、指導者間で共通理解を図ることができます。
- ・ 日常生活の指導には、着替えや食事、生活リズム等、家庭生活に関連する内容も多く含まれます。連絡帳、学級通信、面談等を活用し、家庭との指導の連携を図りましょう。

○指導場面や集団の大きさなど、活動の特徴を踏まえ、個々の実態に即した効果的な指導ができるよう計画されていること

- ・ 日常生活の指導の計画は、朝の会、給食、清掃、通学など、場や機会別に作成します。学級全体の計画に加え、個人別の指導計画を作成します。
- ・ 個別の指導に当たっては、集団を個に分けるのではなく、個の自立を促すために集団を活用し、個の力量が高まることで集団の質が高まるように配慮しましょう。

3 「日常生活の指導」の個別目標の設定

① 個別目標には優先順位が必要

生活全般にわたり全ての内容について個別目標を立てることは、現実的には困難です。効果的な指導を行うために優先順位をつけます。

- ・ 児童生徒の技能や身体的条件等に即して、本人の成就感や達成感が得られる
- ・ 現在の生活の中で、その目標に実用性がある
- ・ 将来起こると予想される職業生活、社会生活に必要な
- ・ 保護者や施設の自立についての希望や願いと一致し、協力の可能性がある など

② 年間目標を設定

年間目標は、優先順位の高い内容から、1年後にできるようになってほしい具体的な姿の方向付けをします。

③ 短期目標を設定

短期目標は、指導によって達成できたかどうか分かるように具体的にします。

- ・ 学習させたい行動が、『知る、理解する、発見する』というのではなく、『言う、つかむ、手を上げる、立つ』というように、客観的な観察、評価が可能である
- ・ 例えば、「靴下につま先を入れてあげれば、後は一人で履く」ように、目標とする行動が、どういう状況下で達成されればよいか明確である
- ・ 例えば、「5回中4回正しく」「指示後3分以内に援助なしで」「〇日間続けて」など回数や時間等で、達成基準が明確である

4 日常生活の指導のポイント

① 行動の分析

指導する行動を、一連の流れとして手順を分析します。

児童生徒により、行動手順は異なります。例えば、「靴下を履く」行動では、裏表を確認する⇒履き口からつま先まで手繰り寄せる⇒つま先を入れる⇒かかとまで履く⇒履き口を引っ張り上げるの、5つの行動でできる場合があります。あるいは、それに加えて、甲の部分を確認する、かかとの位置を確認するなどが必要となり、7つの行動になる場合もあります。

② 指導の手順

指導は、「やさしい行動から難しい行動へ」を原則としますが、次の3つに大別されます。3つの特性を踏まえ、各指導場面でどの方法が効果的かを考えましょう。

ア 日常の流れの中で、目標とするひとまとまりの行動を指導の対象とし、反復指導します。

イ 目標とする行動を分析し、最初の行動から順に指導の対象とします。1番目の行動ができるようになったら、2番目に進みます。

ウ イの手順とは逆に、最後の行動から指導をします。例えば、「靴下を履く」では、かかとまで入れてあげ、そこから引っ張り上げることを指導します。それができたら、つま先まで入れてあげ、その後は自分で履きます。行動の一連の流れは捉えにくいですが、最終の行動は「やった」「できた」という達成感・成就感が得られやすく、発達段階の低い児童生徒の指導に有効です。

③ 支援の工夫

靴箱やロッカーの位置を分かりやすくする個人のマーク、シャツの前後が分かるしるし、朝の会の司会カード、手順表、チェックカードなど自分できる支援を工夫します。

④ 教師の対応

目標とする行動や目標に近い行動には、賞賛や十分な励ましをします。望ましくない行動に対しては、指示の反復、無視、叱責などの応え方を整理しておくことが必要です。望ましくない行動への指導は、ともするとその後の生活がスムーズに進まないことになりがちです。あくまでも、主体的な動きにつながる指導が大切です。

